研　究　報　告

第 14 号

文体論の理論と実践 …… 廣 川 智 貴 (1)
——クライストの『ロカルノの女乞食』を例にして——

カフカの作品における歌のモティーフ …… 佐々木 茂 人 (19)
——『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』を中心に——

オーストリア小説に見る《家族ドラマ》の変遷 …… 國 重 裕 (37)
——M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』(1996)

2000

京都大学大学院独文研究室

前略

この度、大学院生が中心になって編集しております『研究報告』第14号を発行いたしました。

掲載しました論文につきまして、忌憚のないご意見・ご指導・ご批判をお寄せいただければ幸いでございます。

草々

2000年12月8日

京都大学大学院独文研究室
〒606－8501
京都市左京区吉田本町京都大学文学部内
Ｔｅｌ：０７５－７５３－２８２６

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムージルの『特性のない男』研究のための序説 —

金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について

田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・フォン・ドロステ=ヒュルスホフの詩人像とその世界 —

奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技法」について — 小説形式のパロディー —

第2号(1986)

松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カール・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライザー』とその周辺 —

大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの『特性のない男』における〈別の状態〉の行方 —

加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死の恐怖とその超越を中心に —

奥田 敏広: リオン・フォイヒトヴァンガーの小説『成功』におけるヒトラー像について — 20年代の証言の一つとして —

第3号(1988)

加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 —『公子ホムブルク』の多義性について —

兵頭 俊樹: ヘルダーリンの'Wie wenn am Feiertage...'に現れるディオニュソスの形象をめぐって

竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた首』試論

友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・カストルプの形姿をめぐって —

第4号(1990)

津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメシスの悲劇の観点から —

千田 春彦: フライダンクの『ベシャイデンハイト』研究のために — 三つの《はざま》をてがかりとして —

宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 —『ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1) —

千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博士』— デューラーの機能についての一考案 —

斎藤 昌人: ーカフカ像 —『流刑地にて』をめぐって —

第5号(1991)

青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』における「なおざりにされた生」と「達成された社会性」

谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イェナッチュ』について — その多義性に関する一考察 —

津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に —

斎藤 昌人: 閉ざされる世界

第6号(1993)

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進曲』— 「比較」と「繰り返し」のモチーフをめぐって —

千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込められた女房』について — 物語の重層構造の目指すもの —

福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模倣説の輪郭 —

青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなものについての一考察

第 7 号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話なのです」 — パウル・ツェラーンにおける対話の概念をめぐって —

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩集』の数篇から —

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二つの方向 —

第 8 号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二人の女王のドラマ —

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・ツェラーンにおける神義論の問題 —

第 9 号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけるスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー —

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリート・ベンの場合 —

第 10 号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遥』における風景をめぐって — 風景の補償モデルとその矛盾 —

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓話性(1) — 散文小品『通り(I)』について —

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨堂』をめぐって —

第 11 号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文小品について —

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追想』について — その語りの構造 —

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒情的自我〉概念の登場をめぐって

第 12 号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語について

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写について — エクプラシスの観点から —

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴンの小説 —

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen Phantasiewelt und Wirklichkeit – Essay über Ilse Aichingers „Die größere Hoffnung“.

第 13 号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm Tell* als ästhetisches Projekt.

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通俗小説とメルヘンの再話について — 対句法に関する試論 —

INHALT

HIROKAWA Tomoki:

Theorie und Praxis der Stilistik

— Kleists „Das Bettelweib von Locarno“ als Beispiel ..... (1)

SASAKI Shigehito:

Das Motiv des Gesangs in Kafkas Werken

— „Josefine, die Sängerin oder Das Volk der Mäuse“ ..... (19)

KUNISHIGE Yutaka:

Marlene Streerwitz „Verführungen.“ als Familiendrama ..... (37)

研究報告　第14号

非売品
2000年12月発行
発行所　京都大学大学院独文研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
郵便振替 01060-2-38520
印刷所　北斗プリント社
〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町
38-2